農作業 テクニカルダイアリー

抑制トマト

グリーンプラザ第一集出荷センター　営農指導員　宇井 文英

コナジラミ対策について

コナジラミ類(写真❶)は定植初期から収穫後半まで発生し、さまざまな被害をもたらします。コナジラミの生育適温は25℃で、約22日間で卵から成虫になります。

定植前後にタバココナジラミが媒介する黄化葉巻病(写真❷)を発症すると、生育が停止して収量が著しく減少します。また、幼虫が葉に多数寄生して吸汁することで、果実の着色ムラ(写真❸)や白斑症が発生します。さらにコナジラミの排泄物によって、すす病菌が繁殖して黒く汚れる(写真❹)など収穫物への被害も発生します。

耕種的防除と薬剤防除で、対策を行いましょう。

耕種的防除

①コナジラミ類の侵入を防ぐ(防虫ネットの使用)

ハウス内に侵入できないよう、特に出入口付近に0・4ミリ以下の防虫ネットを展張しましょう。

②成虫の発生の確認と捕殺

黄色粘着板(ホリバー)を使用し、発生状況を確認します。補殺効果を上げるためには、最低でも10アール当たり200枚必要です。50枚程度では、防除効果があまり期待出来ません。

③ラノーテープの活用

コナジラミ類の成虫が黄色に誘因される性質を利用した薬剤です。成虫に対する殺虫活性はありませんが、薬剤が成虫の体内に取り込まれ、卵を産んでも孵化が阻害されます。使用後は所定の回収方法で処分してください。

写真❷　トマト黄化葉巻病

写真❶　タバココナジラミ

④コナジラミ類の発生源を除去

雑草が発生源となるので、ハウス内外の除草に努めましょう。

⑤蒸し込み処理

収穫終了後は株元を切断して枯らし、ハウスを密閉することでコナジラミを死滅させましょう。

薬剤防除

農薬による定期的な予防散布を行い、成虫の発生を確認したらすぐに殺虫効果の高い薬剤に切り替えましょう。同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性を高めるので、表❶、表❷を参考にローテーション散布を行ってください。

写真❹　果実の汚れ

写真❸　着色ムラ

表❶　予防のローテーション

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	系統名
スタークル顆粒水溶剤	2000～3000倍	前日まで	2回	ネオニコチノイド系
チェス顆粒水和剤	5000倍	前日まで	3回	ピリジンアゾメチン系
ウララDF	2000倍	前日まで	3回	フロニカミド系
ベネビアOD	2000倍	前日まで	3回	ジアミド系

表❷　発生後のローテーション

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	系統名
トランスフォームフロアブル	1000～2000倍	前日まで	2回	スルホキシイミン系
グレーシア乳剤	2000倍	前日まで	2回	イソオキサゾリン系
ファインセーブフロアブル	1000倍	前日まで	3回	キノリン系

秋冬・春ネギ

営農部営農振興課　営農指導員　小梛 哲義

黒腐菌核病対策

黒腐菌核病は、ネギの重要病害の一つで、土壌中の糸状菌(カビ)によって引き起こされます。近年、被害地域が拡大していることや、被害程度が深刻化していることから、産地では大きな問題となっています。

収穫したネギの白身に、炭のような黒い菌核が付いていた場合(写真❺)は、発生を疑い対策を行ってください。

写真❺　黒腐菌核病被害株

●発病の仕組みと症状

病原菌は菌核の状態で土壌中に存在し、ネギ属の連作によって菌密度が上昇、発病条件がそろうとネギを侵します。連作をやめても菌核は5年以上残るので厄介です。

発病適温は気温15～20℃の時期で、特に秋以降、ネギへの感染が進み、生育の不調が現れ始めます。

病徴は葉先枯れ・生育遅延に始まり、被害が進展すると葉全体が白く枯れ上がり、根や茎盤部は腐敗、やがて枯死します。収穫まで株が残ったとしても、出荷には至らず減収となります(写真❻)。

写真❻　多発圃場の被害

●薬剤による防除

黒腐菌核病に登録のある薬剤は、表❸を参照してください。

ポイントは、どの薬剤を散布するのかではなく、**「いつ・どのように」処理するか**です。

①散布・株元灌注の処理適期は、**9月下旬と10月下旬の2回**です。この時期は前述のとおり、病原菌が動き始める時期であり、近年の試験でも有効な結果が確認されています。

②散布量は登録上限を確保しましょう。散布量の違いによる防除効果の比較試験によると、散布量が多いほど防除効果も高い結果が出ています。生育ステージや被害程度にもよりますが、使用量は**散布の場合で10アール当たり200～300リットル、株元灌注の場合は1トリットル／㎡以上**を確保しましょう。

③モンガリット粒剤は、病原菌糸の伸長を阻害する効果があります。定植直後など、生育の初期に散布することで、予防効果を発揮します。

新たに苗灌注処理が登録拡大

パレード20フロアブル(7月22日登録拡大)の苗灌注処理が、可能となりました。定植後の菌の侵入を防ぐ効果が期待でき、省力的であることからも、秋防除と併せた体系処理を実施してください。

表❸　黒腐菌核病に登録のある薬剤

薬剤名	希釈倍率・使用量	使用方法	使用時期	散布液量	使用回数
パレード20フロアブル	2000倍	散布	前日まで	100～300L/10a	3回以内(ただし灌注は1回以内)
	100倍	灌注	育苗期後半～定植当日	セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊当たり0.5L	
アフェットフロアブル	1000～2000倍	株元灌注	生育期(ただし収穫14日前まで)	1L/㎡	4回以内(ただし株元灌注は2回以内、散布は2回以内)
モンガリット粒剤	6kg/10a	株元散布	生育期(ただし収穫14日前まで)	—	3回以内
セイビアーフロアブル20	1000倍	散布	前日まで	100～300L/10a	3回以内

7月の分析経過について　残留農薬分析点数・・・7月は実施なし　土壌診断点数 …… 合計21点